

クシャイリー『クシャイリーの論攷』より「スーフィー列伝」 解題・翻訳ならびに訳注

東長 靖*

1. 解題

1) 古典的理論書・列伝の形成

9世紀半ばから10世紀半ばは、古典期スーフィズムにおける百家争鳴の時代で、スーフィズムの主要概念・理論に関する議論が相次いで提出された。これに続く10世紀半ばから200年間ほどは、これらばらばらに提出された、したがってしばしば相互に矛盾する教説を体系的にまとめあげることに費やされた。

この時期(10世紀半ばから12世紀半ば)に書かれた古典的理論書には、サッラージュ(d. 988)の『スーフィズムに関する閃光の書』(*Kitāb al-luma' fī al-taṣawwuf*)、カラーバーズィー(d. 990)の『スーフィズムの徒の教えの解明の書』(*Kitāb al-ta'arruḥ li madhhab ahl al-taṣawwuf*)、マツキー(d. 996)の『心の涵養』(*Qūt al-qulūb*)、クシャイリー(d. 1074)の『スーフィズムの学の論攷』(*al-Risāla fī 'ilm al-taṣawwuf*) (通称『クシャイリーの論攷』 [*al-Risāla al-Qushayrīya*])、フジュウイーリー(d. ca. 1075)の『隠されたものの開示』(*Kashf al-mahjūb*)、アブー・ハーミド・ガザーリー(d. 1111)の『宗教諸学の再興』(*Ihyā' 'ulūm al-dīn*) などがある。この内、フジュウイーリーの著作はペルシア語である。(ほかはすべてアラビア語。)これらの理論書は、ただ単に教説を体系化したばかりでなく、スンナ派の神学や法学との整合性を強く意識し、スーフィズムがスンナ派のなかで確固たる地位を占めるべく企図していた。

同時代には列伝も数多く書かれた。スラミー(d. 1021)の『スーフィー列伝集』(*Ṭabaqāt al-ṣūfiyya*)、イスファハーニー(d. 1037)の『聖者たちの飾り』(*Hilya al-awliyā*)、アンサーリー(d. 1089)の『スーフィー列伝集』(*Ṭabaqāt al-ṣūfiyya*) などが有名だが、上記の理論書もたいてい列伝の章を含んでいる。

本稿は、古典的理論書として有名なクシャイリーの著作の中から、列伝の部分(第1部)を採り上げ、その序論と、初期の禁欲主義者として有名なイブラーヒーム・イブン・アドハムの伝記を紹介するものである。なお、イブラーヒーム・イブン・アドハムの伝記がどのように変遷・発展していったかについては、佐藤次高『聖者イブラーヒーム伝説』(角川書店、2001年)にくわしい。

2) クシャイリーの生涯について¹⁾

名前は Abū al-Qāsim 'Abd al-Karīm b. Hawāzin. 376/986 年 Ustuwā (現イラン領内トルクメニスタン国境近く) に生まれ、465/1072 年ニーシャープールで没する。アシュアリー学派神学者、スーフィー、タフスィール学者、ハディース学者。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
京都大学イスラーム地域研究センター副センター長

1) 以降の解題作成にあたっては、[Algar 1990; Ateş n.d.; Brockelmann 1937-49; Forūzānfār 1982; Gramlich 1989; Halm 1986; Harris 1997; Knysh 2007; Uludağ 2002] を参考にした。

幼くして父を亡くし、親戚の Abū al-Qāsim al-Yamānī に預けられ、彼からアラビア語、文学を学ぶ。また、騎士道 (furūsiya)、造兵学 (isti'māl al-silāh) を学んだ。

若い頃、ニーシャープールに赴き、スーフィー・シャイフの Abū 'Alī al-Daqqāq に師事した。彼はこの師の娘ファティマと結婚した。また、トゥース近郊で Abū Bakr Muḥammad b. Bakr al-Tūsī からシャーフィイー学派法学を学んだほか、知識を求めてマルヴにも行ったらしい。さらにニーシャープールでは、神学、法源学をアシュアリー学派のイブン・フーラク (Abū Bakr b. Fūrak, d. 406/1015-6) とイスファラーイニー (Abū Ishāq al-Isfārā'inī, d. 418/1027) について学んでいる。また、スーフィー列伝を書いたことで有名なスラミーにも師事しており、自らの著作の中で頻繁にスラミーの著作を引用している。スーフィズムの師アブー・アリーの死後、彼のマドラサ (391/1001 創立) を、ズィクル集会 (majālis al-tadhkīr) の師として後継し、このマドラサは al-Madrasa al-Qushayrīya として知られるようになった。

時期は定かでないが、この義父の死後、彼は Aḥmad b. Husayn al-Bayhaqī, 著名な神学者イマーム・アル＝ハラマインの父 Rukn al-Islām abū Muḥammad al-Juwaynī と連れだってハッジに旅立ち、途次バグダード、ヒジャーズでハディースを収集した。

ニーシャープールは 429/1038 年にセルジューク朝の手に落ちたが、初代スルターン、トゥグルル・ベグの宰相 Abū Naṣr al-Kundurī が親ムウタズィラ学派の立場からアシュアリー学派を弾圧したこともあり、市内のハナフィー学派とアシュアリー学派²⁾との間に騒擾が生じ、クシャイリーもこれに巻き込まれることとなった。アシュアリー (学派) を「逸脱の徒 (ahl al-bid'a)」とする見解に対して、クシャイリーは 436/1045 年にアシュアリーの正統性を訴えるファトワーを発表した。これにはニーシャープールの著名なシャーフィイー学派学者が署名している。446/1054 年には、この事件への対応として有名な「スンナ派の苦情」(Shikāya ahl al-sunna) を著し、アシュアリー学派を擁護した。同年、対立が激化し、内乱状態になると、敵方により投獄されるが、数週間後、仲間の手でからも救出された。

448/1054 年にはバグダードに出て、カリフ、カーイム・ビ・アムリッラー (al-Qā'im bi Amr Allāh) の厚遇を受け、ハディースを進講した。ホラーサーンに戻ると、ハナフィー学派に占拠されたニーシャープールを捨て、トゥースに移り、ここにセルジューク朝第 2 代スルタン、アルプ・アルスラーンの即位まで滞在した。456/1064 年に即位したアルプ・アルスラーンによって処刑された al-Kundurī にとってかわったニザームルムルクが、両派の均衡を取り戻すと、ニーシャープールに帰還し、ここでその死までの生涯を送った。死に際しては、自らのマドラサ内に埋葬された。

6 人の息子と 7 人の娘に恵まれ、子孫たちの多くはニーシャープールの Shāfi'ī Manī'ī モスクでハティーブを務めた³⁾。

3) クシャイリーの著作について⁴⁾

以下には、刊本を中心にクシャイリーの著作を紹介する。

2) ハナフィー学派は法学派であり、アシュアリー学派は神学派であるが、法学と神学は表裏一体のものとして存在していた。ハナフィー学派法学はマートウリーディー学派神学、シャーフィイー学派法学はアシュアリー学派神学と表裏相応の関係にあることが一般的であった。

3) 子供の数については、先行研究の間で諸説ある。Knysh によれば、息子は第 1 の妻から 6 人、第 2 の妻から 3 人だったとし、Forūzānfar は 2 人の妻から息子 6 人、娘 5 人をもうけたという。

4) 著作については、参考にした先行研究の間に齟齬が少なくなかった。ここでは可能な限り現物にあたり、より妥当性があると思われる見解を採用しておいた。

(1) 独立した刊本のある著作

-*al-Risāla al-Qushayrīya* (『クシャイリーの論攷』)

アシュアリー学派神学との整合性に意を用いて437/1045年に著されたスーフィズムの古典的理論書。‘Abd al-Ḥalīm Maḥmūd 編、Muḥammad ‘Abd al-Raḥmān al-Mar‘ashī 編、‘Abd al-Ḥamīd Ḥamdān 編など、多くの刊本がある。

-*Laṭā‘if al-ishārāt*

スーフィー的タフスィール。437/1045年に書き始めた⁵⁾。スラミーの *Ḥaqā‘iq al-tafsīr* をモデルにしている。Ibrāhīm Basyūnī の校訂による6巻本があり、現在は3巻本で入手可能 (al-Qāhira, 1981-83)。

-*Sharḥ asmā’ Allāh al-ḥusnā*

神の美名 (al-asmā’ al-ḥusnā) を解釈するとともに、そこから導かれる倫理的・霊的教訓を述べたもの。Aḥmad ‘Abd al-Mun‘im ‘Abd al-Salām al-Ḥilwānī 編 (al-Qāhira, 1969)、‘Āṣim Ibrāhīm al-Kayyālī al-Ḥusaynī al-Shādhilī al-Darqāwī 編 (Bayrūt, 2006)、Ṭāhā ‘Abd al-Ra‘ūf Sa‘d & Sa‘d Ḥasan Muḥammad ‘Alī 編 (al-Qāhira, 2001) の刊本がある。

-*al-Taḥbīr fī al-tadhkīr*⁶⁾

上述のシャルフ同様、神の美名 (al-asmā’ al-ḥusnā) を解釈するとともに、そこから導かれる倫理的・霊的教訓を述べたもの。スーフィズム的解釈としては史上最も古いとされる。Ibrāhīm Basyūnī 編 (al-Qāhira, 1968) がある。

-*Naḥw al-qulūb*

文法用語・文法規則をスーフィズム流に説明したもの。al-kabīr と al-ṣaghīr の両著作がある。前者は Ibrāhīm Basyūnī & Aḥmad ‘Alam al-Dīn al-Jundī 編 (al-Qāhira, 1994)、後者は Aḥmad ‘Alam al-Dīn al-Jundī 編 (al-Qāhira, 1977)。

-*Kitāb al-mī‘rāj*

預言者の昇天の性質・意味について考究するとともに、聖者にも昇天があることを主張する著作。スーフィズムの昇天論には第7章で触れる。‘Alī Ḥasan ‘Abd al-Qādir 編 (al-Qāhira, 1964)。

(2) 論文集や雑誌に所収される形で出版されている著作

* *Arba‘ rasā’il fī al-taṣawwuf*, (ed. Qāsim al-Sāmarrā’ī, Baghdād, 1389/1969) 所収の4著作。

-*Mukhtaṣar fī al-tawba* (悔い改め [tawba] に関する論攷)

-*‘Ibārāt al-ṣūfīya wa ma‘ānī-hā* (94個のスーフィズム用語を取り上げ、簡潔に解説するもの)

-*Manthūr al-khiṭāb fī mashhūr al-abwāb* (同様に、スーフィズムの概念を bāb ... という形で順次取り上げ、簡単な解説を加えるもの)

-*al-Qaṣīda al-ṣūfīya* (lām 脚韻によるスーフィー詩)

* *al-Rasā’il al-Qushayrīya* (ed. Pir Muḥammad Ḥasan, Karachi, 1384/1964) 所収の3著作。いずれも、アラビア語著作の校訂とそのウルドゥー語訳が収められている。

5) クシャイリー自身の説明による。[Uludağ 2002] は434/1042-3年に書き始めたとするが、何が典拠かわからない。[Halm 1986] は410/1019年より前に書かれたとするが、後述するように、*al-Taysīr fī ‘ilm al-tafsīr* (*al-Tafsīr al-kabīr*) と混同したための誤りであろう。

6) 実際の刊本および [Uludağ 2002] の情報による。ただし、[Brockelmann 1937-49] は書名を *al-Taḥbīr fī ‘ilm al-Tadhkīr* とする。

-*Shikāya ahl al-sunna bi-hikāya mā la-hum min al-miḥan* (生涯の項で述べた、ニーシャープールにおけるハナフィー学派・アシュアリー学派間の騒擾に関連して、446/1054年にアシュアリー学派を擁護するために著した著作。)

-*Kitāb al-samāʿ* (スーフィーのサマーウを宗教的に正しい儀礼と主張する論考。)

-*Tartīb al-sulūk fī ṭarīq Allāh* (ズィクル作法について9章に分かって述べたスーフィズム実践入門とでもいべきもの。修行者は有声の(舌の)ズィクルから無声の(心の)ズィクルへと進んでいくべきことなどが述べられる。ほかに同著作には、F. Meierによる校訂・独訳 [*Oriens* 16 (1963), pp. 1-39] がある。)

* *Thalāth rasāʾil lil-Qushayrī* (ed. al-Ṭablāwī Maḥmūd Saʿd, al-Qāhira, 1988; Qubrus wa Bayrūt, 2003) ; *al-Iʿlām bi-manāqib al-Islām wa yalī-hi Sharḥ umm al-barāhīn wa yalī-hi Thalāth rasāʾil fī al-ʿaqīda* (ed. ʿĀṣim Ibrāhīm al-Kayyālī, Bayrūt, 2006⁷⁾) 所収の3著作。

-*Lumaʿ fī al-iʿtiqād* (アシュアリー神学派の信条の要訳。R. M. Frankによる校訂・英訳 [*MIDEO* 15(1982), pp. 53-74] がある。)

-*Bulgha al-maqāṣid* (スーフィズムに関する小論攷)

-*al-Fuṣūl fī al-uṣūl* (上述のルマア同様、アシュアリー神学に関する著作。同じく R. M. Frank による校訂・英訳 [*MIDEO* 16(1983), pp. 59-94] がある。2番目、3番目の刊本では、*ʿAqīda ahl al-taṣawwuf wa qawlu-hum fī masāʾil al-tawḥīd* というタイトルが⁸⁾付されている)

(3) 写本で遺されている著作

そのほか、 Brockelmann によれば、下記のような著作が存在する。

-*Istifādāt al-murādāt fī asmāʾ Allāh taʿālā ʿalā wajh al-khāṣṣ*

-*ʿIqd al-jawāhir wa-nūr al-baṣāʾir fī faḍīla dhikr al-dhākir*

-*Arbaʿūna ḥadīthan*

-*Kanz al-yawāqīt*

-*Ḥayāt al-arwāḥ wa al-dalīl ilā ṭarīq al-ṣalāḥ wa al-falāḥ*

-*al-Uṣūl fī naḥw arbāb al-qulūb al-mustanbaṭ*

-*al-Maqāmāt al-thalātha*

なお、*al-Taysīr fī ʿilm al-tafsīr* (*al-Tafsīr al-kabīr*) がしばしば彼に帰されるが、これは彼の息子 Abū al-Naṣr ʿAbd al-Raḥīm によるものである⁸⁾。

4) 『クシャイリーの論攷』について

本著作は、同時代に書かれた古典的理論書の多くと同様、下記の3つの目的を同時にもっていた。

- 7) この刊本では、アーミリーによる著作、アンサーリーによる著作に続いて、クシャイリーによるこの3著作がおさめられている。
- 8) この著作については、先行研究において異論があり、決しがたい。410/1019年より前に書き出されたクシャイリー自身の著作とする立場と、クシャイリーの息子の著作とする立場とが存在する。前者の例として、[Brockelmann 1937-49; Ateş n.d.; Basyūnī 1972; Knysh 2007]、後者の例として [Uludağ 2002] がある。前者の見解は、スプキー (*Ṭabaqāt al-Shāfiʿīya*)、イブン・イマード・ハンバリー (*Shadharāt al-dhahab*)、イブン・ハッリカーン (*Wafayāt al-aʿyān*) の記述に、後者は、H. Ritter の説 (“Arabische Handschriften in Anatolien und Istanbul,” *Oriens*, 3[1950], p. 46) に基づいている。[Halm 1986] はこの著作に言及せず、他方 [Harris 1997] は *al-Tafsīr al-kabīr* と *Laṭāʾif al-ishārāt* を同一著作とみなしている。

第一に、同時代のスーフィーたちに対する批判(いってみれば内部批判)が挙げられる。これは、スーフィズムのあるべき姿の模索と密接に結びついている。したがって、本書のなかの記述は、当時のありのままのスーフィーたちの姿を描くものというよりはむしろ、あるべきスーフィーの理想形を書いたものと考えるべきである。

第二は、スンナ派思想のなかにおけるスーフィズムの「正統性」の主張であった。それまで、ともすれば異端的要素をもっているとみなされがちだったスーフィズムが、スンナ派のなかで確固たる地位を得たのは、クシャイリーら理論書作者たちに負うところが大きい。クシャイリーは、彼の専門であったアシュアリー学派神学との整合性を示すことで、この仕事を成し遂げようとした。同時代の理論書の多くも、スンナ派神学・法学との整合性を示すことに熱心であり、そのことは多くの著作の章構成に見て取ることができる。たとえば、サッラージュ、カラーバーズィー、ガザーリーはいずれも、法学や神学の議論をした後にはじめてスーフィズムに至るという構成をとっている。フジュウィーリーの場合も、その記述の大半を、神の唯一性、信仰といった神学的議論や、ザカート、斎戒(断食)、巡礼といった法学的議論に費やしている。マッキーも、神学・法学的議論のなかでスーフィズムの見解を示している。

第三に、前代に提出された諸概念の間の矛盾を整理し、体系的なスーフィズム理論を形成しようとしたことがある。しばしば、クシャイリーらは古典的な手引書(manual)の作者と呼ばれる(たとえば A. Knysh, *Islamic Mysticism: A Short History*, Leiden, Boston & Köln, 2000, p. 116)が、それはこの第三の目的の側面を言い表すに過ぎない。彼らは単に参照に簡便なマニュアルを作ろうとしたのではなく、激しい批判精神と大きな目標をもって著述にあたったことを忘れてはならないだろう。

さて、『クシャイリーの論攷』は、導入部がまず置かれ、その後、本稿で取り上げる列伝の部分、スーフィズムの主要用語を解説する部分、さらに主要理論をより詳しく述べる部分の3つに大きく分ける形で論述が進んでいく。

導入部では、本書執筆の目的、タウヒードに力点を置いたスーフィズムの基本信条の説明がなされる。第1部では、83人のスーフィーと彼らの言葉が順次説明される。第2部では、「時(waqt)」から「最内奥の心(sirr)」に至る概念が27章に分けて逐次扱われ、第3部では「悔い改め(tawba)」から「修行者への遺戒(waṣāyā li al-murīdīn)」に至る52の理論が述べられている。第2部、第3部においては、第二の目的で述べた同時代のほかの著作の章構成と異なり、スーフィズムの概念を順に説明していくという形をとっているが、内容を読めば、神学との整合性に常に意が払われていることは明らかに見てとれる。

スーフィズムの古典理論を概念・用語毎に説明してくれる本書は、研究者にとっても便利で、多くの言語に訳されてきたが、その際しばしば、第1部・第2部は割愛され、第3部のみが翻訳の対象となってきた。そのため、古典理論マニュアルのようにして便利使いされてきた側面があることは否めない。

5) 『クシャイリーの論攷』への注釈・要約について

本書は、以下に見るように古くから注釈を付されたり、翻訳されたりし、ペルシア文化圏を中心に後代に思想的影響を与えてきた。注釈としては、下記の4著作を数えることができる。

第一は、ザカリーヤー・アンサーリー(Zakariyā' al-Anṣārī, d. 916/1511 or 926/1521)による *Aḥkām al-dalāla 'alā taḥrīr al-Risāla* である⁹⁾。彼は893/1488年に、『クシャイリーの論攷』を教え

9) [Brockelmann 1937-49]は *Iḥkām* …とする

るイジャーザ（認可状）を得ている。アラビア語によるこの注釈は、『論攷』の難解もしくは不明瞭な用語や節に解説を加えたものであり、『論攷』の欄外に印刷された版が複数存在する。

このアンサーリーの注釈に対する疏（再注釈）は、2点遺されている。一つ目は、アンサーリーの子孫にあたる Zayn al-‘Ābidīn al-Anṣārī による *Tahdhīb al-dalāla ‘alā tanqīḥ al-Risāla* であり、シリアのアサド図書館に写本がのこっている。二つ目は、シャーズィリー・アルースィー教団のメンバーであったムスタファー・ムハンマド・アルースィー（Muṣṭafā Muḥammad ‘Arūsī）による *Natā’ij al-afkār al-qudsīya fī bayān ma‘ānī Sharḥ al-Risāla al-Qushayrīya* であり¹⁰⁾、ブーラクから 1290/1873 年に刊行されているほか、1970 年代にダマスクスで私家版の形で出版されている。

第二の注釈は、南アジアのムハンマド・ギースーダラーズ（Muḥammad Gīsūdārāz, d. 825/1422. ギースーディラーズ、ゲースーダラーズとも呼ばれる）によるペルシア語の部分的注釈である。この注釈の一部は、ハイダラーバード・デカンで刊行されているというが、筆者は未見である（*Ketāb-e mostaṭāb-e sharḥ-e Resāle-ye Qosheyrīye*, Haydarābād Dakan: Barqī Peris, 1361[1942]）。

第三は、サディードウッディーン・ラフミー（Sadīd al-Dīn abū Muḥammad ‘Abd al-Mu‘ī al-Lakhmī al-Iskandarānī）による *al-Dalāla fī fawā'id al-Risāla* である¹¹⁾。本注釈は、638/1240 年に完成している。

第四は、ヘラートの学者であったムッラー・アリー・カーリウ（Mullā ‘Alī al-Qārī, d. 1014/1605）による注釈である（Kâtib Çelebi, *Keşf-el-zunun*, vol. 1, İstanbul: Milli Eğitim Basımevi, 1971, column 883）。

また本書には、作者不明の要約 *Irshād al-murīdīn* がある。この要約はシハーブッディーン・スワラルディー（d. 632/1234）に帰されてきたが誤りである。

6) 『クシャイリーの論攷』の翻訳について

本書には、古くから翻訳が存在する。最も古いのは、クシャイリー自身の弟子であったハディース学者、アブー・アリー・ハサン・ウスマーニー（Abū ‘Alī Ḥasan b. Aḥmad al-‘Uthmānī）によるペルシア語訳である。また、オスマン・トルコ語への翻訳としては、ホジャ・サーデッディン・エフエンディ（Hoca Sadeddin Efendi, d. 1008/1599）とセイイド・メフメト・テヴフィーク（es-Seyyid Mehmed Tevfik）によるものがのこされている。後者はスルタン・アブデュルメジト（位 1255/1839–1277/1861）の母后 Bezm-i Alem Sultan の命によって著わされた。

現代語への翻訳としては、以下のようなものがある。最も古くは Olga de Lébédew による仏語による抄訳（*Traité sur le soufisme de l'imam érudit Abou 'l-Qasim*）が 1911 年に刊行されたが、これは愛好家の手になるものであった。より学術的な翻訳は、Richard Hartmann の独訳（*al-Kuschairis Darstellung des Sufitums mit Übersetzungs-Beilage*, 1914）をもって嚆矢とする。ついで、第 1 部の列伝部分のみが英訳されたが、これは W.M. Hume がコネティカットの Hartford Seminary に 1935 年に提出した博士論文の中に収められている。ペルシア語訳としては、Badī' al-Zamān Forūzānfar による全訳（*Tarjome-ye Resāle-ye Qosheyrīye*, Tehrān: Markaz-e Enteshārāt-e ‘Elmī va Farhangī, 1966）、‘Alī Akbar Afrāsiyābpūr による抄訳（*Qerā'at va dark-e motūn-e 'erfānī: Gozīde-ye Resāle-ye Qosheyrīye*, Tehran, 1382[2003]）、現代トルコ語訳としては、Tahsin Yazıcı（*El-Kuşeyri Abdu'l Kerim b. Havâzin*, İstanbul, 1966）、Süleyman Uludağ（*Doğuş devrinde tasavvuf*, İstanbul, 1978）によるものがあり、ウ

10) [Algar 2000] は *Natā'ij al-afkār fī bayān ma‘ānī Sharḥ al-Risāla al-Qushayrīya* とするが、刊本および [Brockelmann 1937–49] によって *al-qudsīya* の語を補った。

11) [Brockelmann 1937–49] による。[Algar 2000] は書名を *al-Dalāla ‘alā fawā'id al-Risāla* とする。

ルドゥー語訳には Pir Muḥammad Ḥusayn によるもの (Islamabad, 1970) がある。近年の翻訳としては、Richard Gramlich による詳細なドイツ語全訳 (*Das Sendschreiben al-Quṣayrīs über das Sufitum*, Wiesbaden, 1989)、B.R. von Schlegell による第3部の英語抄訳 (*Principles of Sufism by al-Qushayri*, Berkeley, 1990)、Rabia Harris による英語抄訳 (*Sufi Book of Spiritual Ascent (al-Risala al-Qushayriyya)*, Chicago, 1997)、A.D. Knysh による英語全訳 (*al-Qushayri's Epistle on Sufism: al-Risala al-Qushayriyya fi 'Ilm al-Tasawwuf*, Reading, 2007) が挙げられる。

【解題への参考文献】

- Algar, H. 2000. "Introduction" to *Principles of Sufism by al-Qushayri* (tr. by B. R. von Schlegell), Berkeley: Mizan Press.
- Ateş, Ahmed. n.d. s.n. "Kuşeyrî," *İslam Ansiklopedisi*, İstanbul: Milli Eğitim Basımevi, vol. 6.
- Basyūnī, Ibrāhīm. 1972. *al-Imām al-Qushayrī: Sīratu-hu, āthāru-hu wa madhhabu-hu fī al-taṣawwuf*, al-Qāhira: Majma' al-buḥūth al-Islāmīya.
- Brockelmann, C. 1937–49. *Geschichte der arabischen Literatur*. 2+3 vols., Leiden: E. J. Brill.
- Forūzānfar, Badī' al-Zamān. 1966. *Tarjome-ye Resāle-ye Qosheyrīye*, Tehrān: Markaz-e Enteshārāt-e 'Elmī va Farhangī.
- Gramlich, R. 1989. *Das Sendschreiben al-Quṣayrīs über das Sufitum*, Wiesbaden GMBH: Franz Steiner Verlag.
- Halm, H. 1986. s.n. "al-Ḳushayrī," *EP*, vol. 5.
- Harris, R. 1997. "Translator's Introduction," in *Sufi Book of Spiritual Ascent (al-Risala al-Qushayriyya)*, [Chicago]: ABC International Group, pp. v–xxv.
- Uludağ, S. 2002. s.n. "Kuşeyrî, Abdülkerîm b. Hevâzin," *Türkiye Diyanet vakfı İslam Ansiklopedisi*, vol. 26.

2. 翻訳ならびに訳注

訳出にあたっては、Abū al-Qāsim 'Abd al-Karīm b. Hawāzin al-Qushayrī, *al-Risāla al-Qushayriyya*, Bayrūt: Dār al-kutub al-'ilmīya, 1998, pp. 21–23 を底本とし、英訳・独訳のほか、フォルザーンファルによるペルシア語訳およびスレイマン・ウルダーによるトルコ語訳を参照した。前稿同様、2006年度の京都大学におけるアラビア語・スーフィズム文献講読で取り上げたものであり、同講読には下記の学生諸君が参加した（敬称略、所属は当時）。横内吾郎、篠田友暁、小倉智史、岩本佳子（以上文学研究科）、高垣ひとみ、上柿智生（以上文学部）、黒田賢治、堀抜功二、丸山大介（以上アジア・アフリカ地域研究研究科）。これら学生諸君から貴重な意見・示唆を与えられることが少なかった。

/p. 21/ この[スーフィー]道の師匠たちの話 (dhikr) と、[アッラーへの道である]シャリーアをより偉大にすることを示すもの、すなわち、彼らの生涯と言説¹²⁾ とに関する、スーフィーたちのうち顕著な人々の章

知りなさい——あなた方を至高なるアッラーが嘉したもうように——、アッラーの使徒——アッラーが彼に恩寵と平安をお与えになりますように——の死後、ムスリムたちはといえば、その時代の最もすぐれた人々で「徴 (‘alam)」という呼称で呼ばれた¹³⁾ のは、ただアッラーの使徒——アッラーが彼に恩寵と平安をお与えになりますように——の教友たち (ṣuḥba)¹⁴⁾ だけであった。なぜなら、それ [アッラーの使徒との交友 (ṣuḥba)] を越える美德 (faḍīla) は何もないからであり、それゆえに彼ら [ṣuḥba] は「教友 (ṣaḥāba)」と呼ばれたのである。

第2世代の人々が彼らを認識した時、教友たちと親しく交わった人を「後継世代 (tābi‘ūn)」と呼んだ。そして、これを最もすぐれた印 (sima)¹⁵⁾ とみなした。それから、彼らの後の人は、「後継世代の後継世代 (atbā‘ al-tābi‘īn)」と呼ばれた。

それから、人々は枝分かれし、レベルもさまざまになってしまった。そこで、人々のなかの選良たち、すなわち、宗教 [イスラーム] の命令への強い関心を持つ人々は、「禁欲主義者 (zuhhād)」とか「賞賛者 (‘ubbād)」とか呼ばれた¹⁶⁾。

それから、諸々の逸脱 (bida‘) が現れ、諸派 (firaq) の間で論争が起こった。そして、どの党派も、自分たちのなかに禁欲主義者がいると主張した。

それから、スンナ派のなかの選良で、自分たちの呼吸が至高なるアッラーと共にあるように注意し、[アッラーを]忘却[する]という不幸から自分たちの心を守る人々が、「スーフィズム (taṣawwuf)」という名前をもって、並ぶもののない存在となった¹⁷⁾。

ヒジュラ暦の200年より前には、これらの偉人たちにつけられた、この [スーフィズムという] 名は [すでに] 周知のものであった。

私たちは本章で、この [スーフィズムという] 道の一群の導師たち (shuyūkh) の名前を、第1世代から、彼らの内の現代の人々の時代まで述べ、至高なるアッラーが望み給うなら、彼らの生涯やことば (aqāwīl) のすべてを、彼らの原則と作法への情報を含むような形で¹⁸⁾ 述べよう。

/p. 22/ アブー・イスハーク・イブラーヒーム・イブン・アドハム・イブン・マンスール——至高なるアッラーが彼を嘉したもうように——。

彼は、バルフの町出身であった。王家の子息の一人であった。ある日、狩に出て、狐やウサギを追いかけては驚かせていた。すると、ある呼びかけの音が彼に向かって、「おお、イブラーヒームよ、

12) 原語は、mā yadullu min siyari-him wa-aqwāli-him ‘alā ta’zīm al-sharī‘a。上の ṭarīqa (道) と脚韻を踏むために ‘alā ta’zīm al-sharī‘a をあえて後に回し、min siyari-him wa-aqwāli-him を先に出した形として理解し、意味上は yadullu ‘alā とつなげて読んで訳した。

13) 校訂者のシャクルどおり、yatasamma と読んでいるが、yattasim (特徴付ける) と読むことも可能かもしれない。

14) この ṣuḥba は、ṣāhib の複数で、教友たちの意であるが、他方、親交そのものをも意味する。次の文の代名詞 hā はこの親交そのものを、hum は教友たちを指していると解される。

15) 上の「徴」とほぼ同義。

16) これより前の世代は、例外なく全員がすぐれた人々であったが、この世代からは選良のみがすぐれた人だと認識されている。

17) もしくは、「……という名前でもって、他から区別されるようになった。」

18) 原文どおりには、「～を含むようなものでもって」。

おまえはこのようなことのために創造されたのか、それともこのようなことを命じられたのか」と呼ばわった。

また、鞍頭からも「神かけて、このようなことのためにおまえは創造されたのでもなければ、このようなことを命じられたのでもない」という声がした。

そこで彼は馬から下りた。

父親の「家来である」羊飼いにであったので、羊毛からできた、羊飼いの上着を取り上げ、それを着て、[その代わりに] 自らの馬と自分の持っていたものを[この羊飼い] に与えた。それから、荒野に入っていき、さらにマッカに入り、そこでスフヤーン・サウリー¹⁹⁾、フダイル・イブン・イヤード²⁰⁾ と親交を結び、それからシリアに入って、そこで没した。

彼は、刈り取りとか、庭番とかといった、自らの手についた職から食を得ていた。

彼は荒野で、ひとりの人に出会ったが、彼は最も偉大な神の名を教えてくれた。そこで彼が[この人] の後について「最も偉大な神の名」を唱え、ヒドル——彼に平安あれ——に出会った²¹⁾。[ヒドルは] 彼に、「わが同胞のダーウードが最も偉大な神の名をおまえに教えたのだぞ」と言った。

このことについては、アブー・アブドゥッラフマーン・スラミー師——アッラーが彼を嘉したもうように——が我々に伝えて曰く、ムハンマド・イブン・フサイン・イブン・ハッシャブが我々に伝えて曰く、アブー・ハサン・アリー・イブン・ムハンマド・ミスリーが我々に伝えて曰く、アブー・サイード・ハッラーズが我々に伝えて曰く、イブラーヒーム・イブン・バッシャール²²⁾ が我々に伝えて曰く、「私は、イブラーヒーム・イブン・アドハムの親交を忝うしており、『私にあなた様の命(ame) (amr)²³⁾ の始まりについて教えてください』という、上のようなことを話してくれたのだ。」

イブラーヒーム・イブン・アドハムは、節制という徳目において、高德の人(kabīr al-sha'n)であった。彼については、「おまえの糧を求めなさい。ただし、夜は起きて[勤行に励み]、昼は斎戒するのは、禁じられていないぞ²⁴⁾」と言ったと伝えられている。

また、彼の通常の祈り(du'a')は「おお神よ、あなたに従わない罪の低みから、あなたに従う服従行為の高みへと私を移したまえ」であったが、イブラーヒーム・イブン・アドハムには「肉はもう値が上がってしまったわい」と言う声が聞こえた。

そこで、「それを負けさせろ」つまり、「それを買うな」という声が聞こえた。[イブラーヒーム・イブン・アドハムは] これについて次のように詩に詠んだ。

ものが私には高ければ、あきらめる

そうすれば、その時高かったものが、安くなっているのだ

/p. 23/ ムハンマド・イブン・フサイン——至高なるアッラーが彼を嘉したもうように——我々に伝えて曰く、私の聞いたところではマンスール・イブン・アブドゥッラーが曰く、私の聞いたと

19) ハディース学の大家。スフイーの先達としてもよく言及される。97-161A.H.

20) ハディース学の大家にして、シャーフイーの師匠。スフイーの先達としてもよく言及される。105-187A.H.

21) 名を唱えると、いきなりヒドルが目の前に現れた、ということ。ヒドルは、イスラーム世界で広くその存在が信じられている不思議な力を持つ人。クルアーン 18: 60-82 においてムーサーと共に旅する不思議な人物はヒドルのことだとされる。

22) イブラーヒーム・イブン・アドハムの従者。

23) 神に命じられた運命のようなもの。「あなたの命の始まり」で、転じてあなたの人生の転機、くらいの意味か。

24) 糧を求めることは許されるが、欲望を抑え、節制することの方が求められる、の意。

ころではムハンマド・イブン・ハーミドが曰く、私の聞いたところではアフマド・イブン・ハドラワイヒが曰く、イブラーヒーム・イブン・アドハムはタワーフ（カアバ神殿の周りを反時計回りに7回まわる巡礼の儀礼）中の一人の男に次のように言った。

知れ、6つの障碍を乗り越えるまでは、正しき者たち（ṣāliḥīn）の段階には至らない。

その第1。慈悲の門を閉ざし、苛烈の門を開け。

その第2。高みの門を閉ざし、低みの門を開け。

その第3。安逸の門を閉ざし、尽力の門を開け。

その第4。眠りの門を閉ざし、不眠の門を開け。

その第5。奢侈の門を閉ざし、清貧の門を開け。

その第6。希望の門を閉ざし、死への準備の門を開け。

イブラーヒーム・イブン・アドハムは、葡萄の見張りをしていた。一人の兵士が通りかかり、「この葡萄をひとつくれ」といったので、「その持ち主がお命じにならないので」と答えた。

すると、[この兵士は] 彼を鞭でたたき始めたので、[イブラーヒームは] 頭を垂れ、「私の頭を打て。何度もアッラーにそむいてきた[頭なのだから]」と言った。すると、その男は不審がり、立ち去ってしまった。

サフル・イブン・イブラーヒームが語ることには、私はイブラーヒーム・イブン・アドハムと親交があった。[ある時私が] 病気になると、私のために費えを払ってくれた。それで私はさもない気持ちを起こした。すると彼は自分のロバを売り、その対価を私のために使ってくれた。私の具合がよくなった時、「ねえ、イブラーヒーム。ロバはどこだい？」と言うと、「売り払っちゃったよ」と言ったので、「それじゃあ、僕は何に乗ればいいんだい？」と言った。すると、「兄弟よ、僕の首に乗りたまえ」と言い、3駅分私を運んでくれた。